21. 骨シンチグラムで興味ある経過をとった2症例

沢井　博司　　伊丹　康人
大森　董雄
（慈大・整）

整形外科領域においては多量の移植骨を必要とする場合があり，特に移植骨の長さ，支持性を必要とするような場合には，腓骨を利用することが少なくない．今回われわれは，上腕骨骨嚢腫の患者に骨移植を行ない，同部の骨生着の状態ならびに腓骨摘出後の Donor Site の状態を経時的に観察し，また，大腿骨骨髄炎の患者に，病巣切除後に健側より巨大な骨移植を行ない，その経過を観察した結果，骨シンチグラムにて興味ある所見を得たので症例を供覧する．

症例1は，22歳の女性，X線像で左上腕骨骨嚢腫および病的骨折と診断し，直ちに入院，手術を行なった．術後のシンチグラムでは，左上腕の骨移植部は術後18ヵ月で左右差をみとめなくなった．また，腓骨剔出後は欠損像をしめしたが，これに対応する脛骨骨幹部外側には6ヵ月で軽度の異常集積をみとめ，18ヵ月では強く，30ヵ月では集積が減弱した．このシンチグラム所見は，腓骨摘出後脛骨に生じた骨改変現象を意味し，活発な代謝状態をX線に先がけて明瞭に示したものと思われる．

症例2は，右大腿骨及び左下腿骨骨髄炎の31歳の男性で，左大腿切断，右大腿骨病巣切除後，同部へ巨大骨片の Cable Graft を行ない骨シンチグラムにて，移植骨と宿主骨に生ずる変化を分離して観察した．同部のシンチグラム所見は，移植骨両断端部の骨再生修復過程における活発な骨代謝活動を示し，時間の経過とともに，その活動が穏かになる様を示しているものと思われる．

22. ^{201}TlCl による甲状腺癌鑑別の可能性

沢　　久　　伊丹　道真
福田　照男　　古川　　隆
原田　　繁　　土橋　宣昭
深草　駿一　　筧　　弘毅
（日赤医療センター・放）
高橋　有二　　藤本　吉秀
太中　　弘
（同・外）

最近，甲状腺癌の検出に ^{201}TlCl scintigraphy の有用であることが報告されている．利波ら，竹内らの報告をあわせると甲状腺癌では92%に ^{201}TlCl の集積が認められたと述べている．しかし，非癌例である腺腫様甲状腺腫では50%，甲状腺腺腫では52%，慢性甲状腺炎では100%に集積が認められることより癌との鑑別は困難である．

われわれは ^{201}TlCl 静注後の至適撮像時間を検討していた際に，甲状腺癌では静注後72時間でも集積が認められたことより，経時的 scintigraphy が癌，非癌の鑑別に役立つと考え，Na^{131}I-scintigram で欠損像を示し，しかも ^{201}TlCl で同部の陽性描画のみられた例について，静注後2時間の delayed scintigram を検討した．

対象とした症例は組織学的に確定診断のついている甲状腺癌5例，腺腫様甲状腺腫2例，慢性甲状腺炎2例の計9例である．その結果，甲状腺癌では全例 back ground activity との差によって陽性描画がより鮮明になっているのに反し，腺腫様甲状腺腫，慢性甲状腺炎例では back ground activity との差が小さくなり陽性描画が不鮮明になるという診断上有用な知見を得たので文献的考察を加えて報告した．

Presented by Medical*Online